

安智史

「萩原朔太郎というメディア」

—ひき裂かれる近代／詩人—

正田 雅昭

朔太郎研究者としては、既に中堅の中心として研究業界を牽引している安智史の待望の論集が刊行された。論は、古いもので一九九三年、新しいもので二〇〇五年の群馬学連続シンポジウムの発表を基にした書き下ろしを含んでいるから、一五年來の朔太郎研究の一成果である。むろん、単なる論集ではなく、初出には大幅な書き下ろしが行われているの言うまでもなく、不勉強な大学院生時代の私には、ほぼその論の射程が理解出来なかつたものが、実に明快に語られていると感じることは、単に私の歳のせいではないだろう。

先に、本書の全体像を概観しておく。

序章 二つの世界戦争のあいだに

〔第一部 詩語としての日本語と朔太郎〕

「リズム」から「調べ」へ——詩論における日本語との葛藤と夢想

ひびきの美学——萩原朔太郎の文語詩観

〔第二部 声のメディアと朔太郎〕

ソングの誘惑——昭和流行歌の時代と晩年期の詩観

複製技術時代の聴覚——萩原朔太郎と小林秀雄をめぐって

〔第三部 大衆社会状況のなかの朔太郎〕

変貌する「群集」／「私」——「群集の中を求めて歩く」をめぐって

猫町温泉——近代（裏）リゾート小説としての「猫町」

〔第四部 視覚の近代と朔太郎〕

網膜のスクリーンに投射されるもの——萩原朔太郎初期詩篇と映画

くり返す亡霊たち——ベルクソン・死霊の女・チャップリン

無名化Ⅱ 普遍化される郷土——萩原朔太郎撮影写真をめぐる

全集未収録——萩原朔太郎資料紹介（詩話の解散に就いて）「男やもめの心境を訊く」

それにしてもこの「萩原朔太郎というメディア」というタイトルは難しい……。それとも、私が問題を複雑にしているだけなのだろうか。そのこともあって、最後の第四部から見たい。

第四部「視覚の近代と朔太郎」は、メディアとして映画が取り上げられる。第1章「網膜のスクリーンに投射されるもの」では、詩篇「殺人事件」を中心に論がすすみ「青猫」期より前までの朔太郎に焦点が当てられる。映画が可能にした新たな近代的体験を「犯罪」と詩の出逢いとして再定義し、特に犀星との比較により朔太郎の視覚体験の変容課程を明らかにしている。つまらない指摘だが、やはりこうした章の場合、中心的に論じられる詩は、本文中に大きく引用してあると、少なくとも私の様な門外漢の読者には親切である様な気がする。（それこそが、詩の論の場合、紀要や雑誌掲載論文ではない、書籍の贅沢だから）

河上徹太郎と北川透の対立する論点の間に菅谷規矩雄の慧眼を据えることにより、従来の先行論を止揚し、そこに安の近代映画論がクロスする展開は、非常にドラマチックであり、映画と誌を論じてゆく大

大きな可能性を感じさせる。視覚的所有の欲望や、ミクロの世界の可視化体験、大量破壊や大量殺戮の追体験、自己を凝視する体験やそこから派生する自己分裂への誘惑……詩への影響以前に、この時期に映画が与えた近代的体験は、意外なほど明らかにされていないことが多い、という認識を新たにしたい。

ただ、朔太郎論という本書の性質上、当然のことだが、こうした近代的映像体験の射程が朔太郎に焦点化された時、朔太郎という人物の強烈な個性に翻訳され、ある種の特殊性を称揚する議論に結びつくくらいがある感じを受けた。しかしながら、論者がそのことに無自覚であるわけではない。その意識は、後の「補章」にはつきりと現れている。

最後の「くり返す亡霊たち——ベルクソン・死霊の女・チャップリン」は、従来、その詩業の前半部に集中するくらいがあった朔太郎詩と映画との関係を、「青猫」詩篇への移行期以降の詩業にこそ見いだすべきであるという視点から論じられている。それらの詩へと通じるキーワードとして有名な「憂鬱」を、初期の詩篇と映画との関

という詩と、聴覚からイメージへと「ソング」との邂逅を、朔太郎という「場」を通じて論じたものである。第一部の「詩語としての日本語と朔太郎」や「リズム」から「調べ」へ——詩論における日本語との葛藤と夢想」や「ひびきの美学——萩原朔太郎の文語詩観」は、近代詩の開拓者であった朔太郎が、終始迷れられなかった日本語への二律背反する想いを軸に、まさに朔太郎研究の中心的課題に一石を投じたものであるといえる。その意味では、タイトルにある通り、朔太郎自身と同様に、本書において朔太郎を通して射程とされている近代自体もまさに「ひき裂かれて」と言える。にもかかわらず、「朔太郎」と「メディア」という関係に、違和感をぬぐいきれないのはなぜだろう。

もちろん、言文一致、口語と文語、複製時代、聴覚と視覚、群衆、大衆といった問題が、メディアと無関係であるはずがない。そもそも、近代を論じるにあたって、それも、それを文学者を媒介にして論じる場合に、メディアの問題を射程に入れない論はあり得ない。それは、当然である。一応、文学の訓練を受けているはしこれである私

連で論じることにより論の端緒を得て、ベルグソンの映画論との共振を論じながらも、映画嫌いであったとは異なり、生涯にわたって「憂鬱」という感性を媒介に映画への愛着を持続し続けていた朔太郎像をチャップリンへの言説を通して描き出したものである。

朔太郎にとつての映画が、死への欲動と再生し続ける生への意志を示す両義的な存在であったという指摘は、論者が指摘する様に朔太郎と映画の関係そのものを再考するきっかけとなるだろうと思う。が、同時にこうした視点が朔太郎研究で問われなかったことは、我々が考える近代と映像との関係が、非常に一面的であったことに通じ、問題は朔太郎研究に限定されるべきことでないことを教えてくれる。「亡霊」という語が持つ批評性を利用する手つきに、デリダが「亡霊」という語を導入することに、単なる表象批判ではなく、人間性(統整の理念としてのそれ)をマルクス主義批判に導入し、グロバーリゼーション及びそれに踏み絵を迫るようなマルクス主義的言説空間の両方を批判した手つきを思い出した、といえは言い過ぎだろうか。

にも、そのことはわかっている(つもりである)。しかし、素材に読んだときに所謂「メディア」と朔太郎の関係が、はつきりと掴める様になるのに、一つ何かを経る必要がある様などまどいを感じたのである。

一読すれば、本書は実に朔太郎の問題から、大きな近代的な問題へとその射程が開かれていくことが分かる。しかし、やはり文学の門外漢を含めた多くの読者にとつてみれば、本書の入り口は「朔太郎」と「メディア」である。そうした入り口から本書の射程に導く為の「イントロダクション」にもかかわらず、「メディア」に関する言及がわりとあつさりとしていたことが、そうした「とまどい」を呼び込んだ様な気がする。論者は、以下の様に述べる。

そもそも、書記行為をおこなう存在そのものが、多なる要素の複合された一つのメディア(媒体)にはかならない。

我々が「常識」としているメディア観は、一般に開かれたそれとは異なる。我々には「常識」化しつつある、「文学」や「雑誌」をメディアとしてとらえる視点自体

補章の「無名化II 普遍化される郷土——萩原朔太郎撮影写真をめぐる」は、朔太郎自身が撮った郷土の写真が撮った論である。ここでは、朔太郎自身が撮った写真であるのにもかかわらず、その写真が朔太郎の郷土観を裏切ってしまう様相を明らかにしている。実に興味深い議論であった。これが「補章」という位置を与えられていることの著者の意識はわからないが、私には「補章」が、前章までの朔太郎のメディア論と対峙することにより、詩と詩人とメディアの送り手と受け手という錯綜する関係の中にある問題系を様々に喚起させてくれる様に思われた。

ここまでの朔太郎論は、まさに「朔太郎」と「メディア」が含まれる書名に対する読者の「期待の地平」と一致するものである。しかし、その前の第三部の「大衆社会状況のなかの朔太郎」や「猫町温泉——近代(憂)リゾート小説としての『猫町』」は、朔太郎のテクストを近代(特に「大衆」や「群衆」との関係として読み替えるものであるし、第二部の「声のメディア」と朔太郎」と「ソングの誘惑——昭和流行歌の時代と晩年期の詩観」は、視覚から聴覚へ

だって、まだまだ「普及」の余地があるのではないか。むしろ、論者がそのことをわかっていない訳ではない。だからこそ「朔太郎」と「メディア」ではなく、朔太郎というメディアとして、そのテクスト自体を「メディア」とする視点を提供しようとしたのだろうと思う。ならば、朔太郎の「テクスト」ではなく、朔太郎自身こそが「メディア」であるとはどういうことか。それは、「朔太郎」という「テクスト」と一括する、これまで馴染んできたとらえ方とは、いかなる相違を生み出すのだろうか。

自分を含めて詩の研究者は、文学的領域のど真ん中に居るがゆえに、アカデミックな領域においても、その言説をいかに「開く」という切実な要求をつきつけられている。本書もその要求に十分に答えている。だからこそ、朔太郎を「詩人」と呼ばず「文学者」と呼ばず、「メディア」と定義することに、もつと挑発的かつボレミックな言葉に紙幅が費やされてもよかつた気がするの、私がボレミックだからだろうか? 一方では、それ自体が、少なくとも文学的な要求ではないともいえる……。ひき裂かれているのは、私か?

最後に「全集未収録萩原朔太郎資料紹介」と索引が付されている。前者の資料的価値については、朔太郎の門外漢である私には、その価値はわからない部分もあるのだが、「詩話会の解散に就いて」は詩史的興味から重要なものであることは言うまでもない。一方「男やもめの心境を訊く」は、朔太郎の読者サービスとしての側面からか、俗的な女性観を標榜している点が、非常に面白かったことを付け加えておこう。
(二〇〇八年一月二五日 森話社刊 四〇二頁 五四〇〇円)

(ひきたまさあき 長野県短期大学助教)

象報

△立教大学日本文学会ではHPを作成し、学会・講演会などのイベント情報を提供しております。また、同HPでは「立教大学日本文学」総目次、「立教大学日文学ニュース」目次も公開しておりますので、ご利用ください。URLは <http://nikkyonichun.blog96.fc2.com/> です。

△五月十八日、日本文学専修の一年生を対象とした新入生歓迎文学散歩が昨年に引き続き行われました。幹事を務めた藤井淑禎教授の他、加藤定彦、加藤睦、小嶋菜温子、各教授が引率、学生約三十名の参加のもと、回向院、旧国技館跡、芥川龍之介旧居跡と通った小学校、舟橋聖一旧居跡、旧本所公会堂、そして関東大震災関連の記念館をたどりましました。

△「立教大学日文学ニュース」は日本文学会会員と賛助会員に対して定期的に送付しておりますが、来年度から賛助会員を同窓会員に改めます。同窓会員として入会をご希望される方は奥付にあるサポートセンターへの連絡、または、日本文学会のHPより電子メールにてお問い合わせください。

△日本文学専修の教員が主体となって活動している江戸川乱歩記念大衆文化研究センターから「大衆文化」創刊準備号が刊行されました。本格的な創刊号も今年度中には刊行される予定です。

△韓国国立放送大学のテレビ講座の収録が、一月に江戸川乱歩邸内において行われ、日本文学専修の教員が出演しました。講座の題目は、「日本文学の流れ1(古典文学)」。六月に韓国で連続講座として放映され、好評を博しました。参加した教員は、沖森卓也、小嶋菜温子、小峯和明、加藤睦、加藤定彦、渡辺憲司。本学会員の小森潔氏も講師として加わりました。